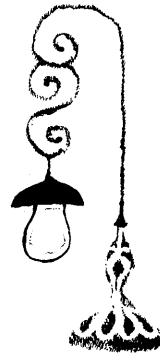


## 震災後の子どもたち(6)

# 地震よりこわいもの



森末 哲朗

十一月十三日付の地元紙によると、神戸市は阪神大震災による死亡者として、新たに百六十五人を追加認定したという。その結果、神戸市内の震災死者は四千四百八十四人にも上り、兵庫県内では六千二百四十九人にも上るといふ。すごい数だと改めて思う。

しかし、世界に眼を向けると、その十倍、百倍もの人たちが飢えや寒さや砲撃にさらされて死んでいっていることも事実だ。そしてこわいなと思うのは、そのことに対して割合とにぶい自分がいることだ。旧ユーゴスラビアの中で、迫撃砲の砲弾が撃ちこまれる街の中で、コートの際を立てて震えている老

人の映像がテレビ画面に映し出される。一瞬、地震のあった朝に、六甲の街角のあちこちで毛布を身体にまとい、放心したようにしゃがみこんでいた老人たちの姿を想い出す。でも本当のところはピンと来ていない自分がいる。しかし、もしも、自分の家族の誰かがサラエボに居て、毎日のように砲撃にさらされているとしたら、ぼくは間違いなくいてもたってもいられなくなるだろう。

あの一月の大地震についても似たようなことを感じる自分がいる。

どんぐりクラブ（六甲学童保育所）の建物は壊れてしまったけれど、そのためにいまだにテント暮らしが続いてはいるけれど、あの日の激震のために死んだりケガをしたりした子は一人もいなかった。ぼくの家族も建物は半壊になってしまったが、全員無事だった。

正直、「よかった」と思った。

亡くなった方には悪いが、自分の家族や友人やど

んぐりの子どもたちが建物の下敷きになって圧しつぶされて死んでしまったとして、その時に感じるであろう悲しみと同じものを六千二百四十九人の人たちに感じてしまったらきつとその瞬間に発狂してしまうだろう。

名前も顔も知らない外国の人たちが、飢えや戦争のために死んでいるということ、自分にとってとても身近な誰かが死んでしまうということの間には大きな隔りがあるように思う。善いか悪いかは知らない。

いま、おとなのぼくがこんなことを考えている時、じゃあ子どもにとってはあの大地震はどう映ったのだろうという疑問が湧いてくる。同じ神戸で同じ時間を揺れにさらされながら過ごしたとはいえ、映り方が同じということはまずないだろう。子どもはおとなよりもずっとずっと具体的な生き物だ。行ったこともないヨーロッパの国の見知らぬ人の不幸など、まず考えることもないだろう。自分の親、

兄弟、親戚の誰か、どんぐりクラブの仲間、学校の友だち、あの駄菓子屋、いつも立ち読みしているあの本屋、それらが最大の関心事だろう。それらが無事とわかれば、へし折れた電柱、凹凸になった道路、くずれおちた家などのあの見るも無残な街の風景は、おとなのぼくが見るのとは少し違った見え方がされていたような気がしている。

ぼく自身が子どもの頃、大きな台風に襲われたことがある。

一晩中風のうなる音を聞き、おびえながら夜を過ごしたというのに、台風が過ぎ去ったあとの風景は妙に胸おどるものだった。

立ち木がなぎ倒されている。水田は川が氾濫して水びたしになっている。お百姓さんの嘆きを想像するにはあまりに幼かった。ただただ圧倒的な風の力のすごさに驚嘆するばかりだった。

漁師の人たちの心配などどこ吹く風で、わざわざ荒れ狂う海を見に出かけたこともある。

台風の中をどきどきしながら荒海を見に出かける子ども。そんなことはほしくないようにと心配するおとな。

この構図は幾百世代も昔から、子どもがいておとながいる限りは絶えることなく続いてきた関係ではないかと思われる。

神戸を襲った激震から二週間が経った二月一日、「臨時どんぐりクラブ」は再開された。

どんな顔をして子どもたちはやってくるだろうと心配していたが、大方の子どもは屈託がない。勿論、表面上の屈託のなさとは別のところで、身体に刻み込まれた恐怖心を隠し持つてはいるのだろうけれど。

「こんなん、落ちとった」

「こんなもんも、あったで」

まだ新品に近いぬいぐるみ、組み立て前の箱に入ったプラモデル、大好きな漫画本、おもちゃの鉄砲、ありとあらゆる物が拾い集められてくる。あの頃の街角といえは、所帯道具一式がそっくりそのまま

ま荒ゴミとして、ゴミステーションにうず高く積み上げられていたものだ。

タンズと一緒に葉書の束が捨てられていて手にとってみると戦時中に使われた切手が貼られている。きつと大切な葉書だったのだろう。それがゴミの山の中に埋もれている。持主はどうしたのだろう。亡くなったのか、それとも家人の誰かが勝手に処分してしまったのだろうか。色々と想いを巡らせてみる。

荒ゴミという名前で片づけられてしまう物たちに哀惜の情を感じているほぐがいる。

だが子どもたちはもう少し現実的だったようだ。普段なお金を出して買わねばならない物が、言い方は悪いかもしれないがタダで手に入るのだ。

「おい、あそこに行ったら、ええもんほかしたったで」

「どこ、どこ」

「どんぐりのそばの、自動販売機のところやんか」

「ああ、あそこな」

子どもたちの荒ゴミ参りは連日のように続いた。

地震Ⅱ悲惨Ⅱ子どもたちは暗い顔Ⅱだから励ましを、という風な援助など格別必要としない世界を、ぼくの周辺の子どもたちは持っていた。学校が機能していなかったから、毎日黒板とにらめっこしないでいいという解放感もあったのかもしれない。新聞などでは一日も早く学校が再開されることを望むという論調が活字として躍っていたが、子どもの本心は別のところにあつたような気がしている。二月になり、三月になり、激震地とそうでない地域とのばらつきはあつたが、閉鎖されていたクラスが再開し始めた頃、「やつと学校、始まったな」と子どもに語りかけたら「このままがええのに」という返事を返した子どもがいた。

ここまでは、当時の子どもたちのいわば「昼の顔」である。

陽が落ちて、あたりが闇に包まれると、おとなのぼくも正直言っておわかった。

「最大余震が、一か月後の満月の夜に、再びやってくる」というような、ウソかホントかわからないような流言がそれはそれで妙に真実味を帯びて聞こえたことは事実だ。何百回も続いた余震の毎日の中で、一つ一つの揺れに身体がビクンと反応する。昼間は動きまわっているから、震度二や三では体感しないことの方が多いのだが、夜になるとかすかな揺れでも感知してしまうのだ。ストレスの解消と安眠のため、ぼくの酒量は飛躍的に増えたことを覚えている。

だが、子どもは酒に頼ることができない。

では何に頼るかといえば、家庭の中では親の存在なのだ。不気味な音をたてて余震が襲ってきても、そばに親がいれば手を握り合って恐怖に耐えることができる。このことの意味はとても大きい。真っ暗な闇の中で家具がカタカタと音をたてる時、子ども

のおびえといったらとても形容できるものではないだろう。でも、しがみつくことのできる親がいることで不安や恐怖の総てを委ねることができるのだ。

子どもにとって「地震よりこわいもの」がある。

それは「地球が揺れること」ではなく「親たちが揺れること」だろうと思う。揺れ続けるプロセスそのものと、その結果としての離婚ではないかと思う。

物理的な力で「家屋」を崩壊させるのが地震だとするなら、精神的な力で「家庭」を崩壊させるのが離婚なのだろう。

地震は不意に訪れてくるが、離婚は不意には訪れてはこない。何か月も何年もかけて両親である男と女が揺れ続け、その終着駅としてぎりぎりの選択がやってくる。子どもはその長い長い時間を不安に包まれて過ごさねばならない。

どんぐりクラブで十四年間、子どもたちとその家庭と向き合ってきたが、単なる夫婦喧嘩を越える位

置に立ってしまった両親を持つ子に何度となく出会ってしまった。その子たちの表情は、余震の時に見せたおびえの表情よりもっと暗いものがあつたように記憶している。ある子はチックのサインを示した。ある子は一日中唇のまわりを舌でなめまわしかさぶたになるほどひどかった。学校に行けなくなつた子もいた。両親の言い争う声をふすま越しに聞かされ、学校どころではない気分になつたようだ。

……ぼくは離婚というものを裁こうとは考えていない。一人の男と女が、もうこれ以上一つ屋根の下では暮らしていけないという壁にぶち当たることは、もしかするとすべての夫婦が抱えている問題なのかもしれないのだから。

だが子どもたち、特にぼくが毎日つき合っている小学生たちの年頃には、親が揺れている毎日はある意味では地震よりも酷なものがあるのではないかと、やはり思う。

(六甲学童保育所どんぐりクラブ指導員)



▲傾いた家、デコボコの道路。子どもたちは毎日毎日廃材を運んだ

…前略…多くの避難者が暮らしている六甲小学校では、湯タンポを持ってきて「お湯を下さい」と言ってくる人、ポットを手にお茶を飲むためのお湯の必要な人、カップラーメンをもってきて「お湯も入れて」と言う人、様々な人がお湯を求めてやって来るコーナーがあります。学校の北側の一角にあってPTAの人たちが中心になって一日中ドラム缶の大型のようなカマドにマキを加え続けています。

どんぐりの子どもたちは、二月六日からこのコーナーの「材木調達役」を開始しました。

ノコギリ、ハンマーを手に長い柱を適当な長さに切ったり、クギだらけの平板をへし折ったり、子どもたちはよく働きました。多い日は午前二回、午後二回という感じで、昼食をはさんでほぼ一日中この作業にかかった日もあります。

車に満載になった廢材を、デコボコや地割れの目

立つ道路を通して学校まで運ぶのも子どもたちがやっつけてけます。かなりの重量があるので、文字通り「ちからを合わせる」ということがないと、車は前に進みません。カジトリを誤ると道路脇に停めてある自動車にぶつかりそうになることもあります。

初めの頃は足なみが揃わずあっちへフラフラ、こっちへヨロヨロしていましたが、ほぼ毎日の仕事としてもう一カ月余りやってきた子どもたちですから、けっこう堂に入ったものです。「ぼうず、がんばるとんなア」と、声をかけてくれるオッチャンもいます。

「ヨイショ、ウンショ」と車を押していく子どもたちの姿を見ていて、何とも言えない誇らしい気持ち湧いている毎日です。

(95・3・12 どんぐりクラブ発行)